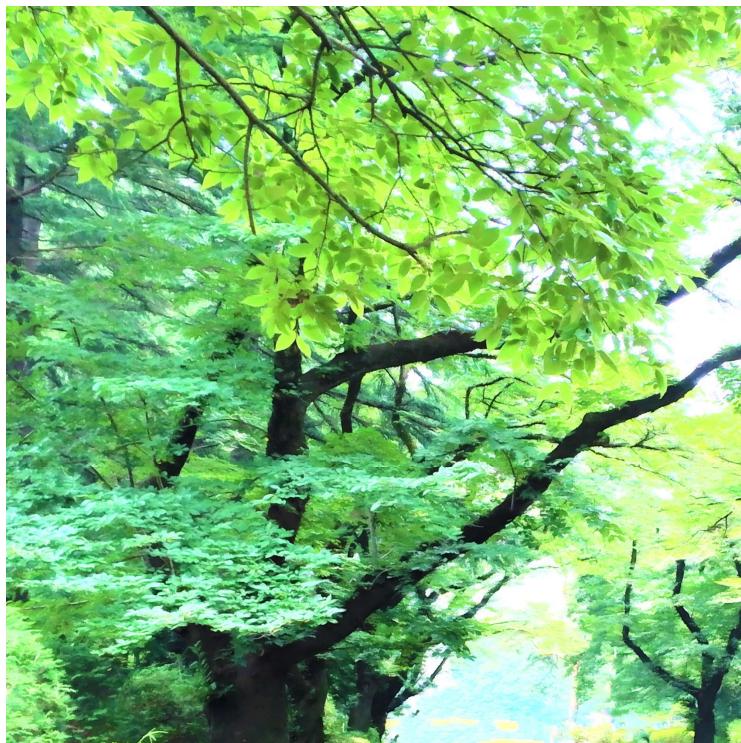


LEVEL  
**4**

Web  
Tadoku  
Books

太宰治 『葉桜と魔笛』より

葉 桜 と 口 笛





朗読音声のダウンロード  
Audio download

## よ　まえ ★読む前に Before you read

### 《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



### 《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



お婆さんが昔のこと話を話しています。

桜の花が散つて、桜の葉は緑がきれいな季節になりました。

この季節になると、私は死んだ妹のことを必ず思い出します。今から三十年前の五月のことでした。妹は髪が長くて、とてもきれいで、頭のよい子でした。でも、体が弱くて、十八歳で死んだのです。

そのとき、私は二十歳でした。母は私たちが子どものときに死んで、私は父と妹と、三人で田舎に住んでいました。父は中学校の校長で、とても厳しい人でした。

妹は、前からずつと病気でした。その年の二月ごろ、医者は父に言いました。「娘さんは、あと三ヶ月でしょう。もう、私にできることは何もありません」私はとても悲しかったです。三月、四月と、時間が過ぎていきました。何も知らない

いもうと  
妹は、寝たきりになつても、ふとんの中なかで明あかく歌うたを歌うたたり、冗談じょうだんを言つたりして  
いました。あと一ヶ月いつヶ月ぐらいで、いもうと妹は死んでいくのだと思おもふうと、わたしは胸むねが苦く  
て気が狂くるいそうでした。

そして、五月になりました。

ある日ひわたしは、いもうと妹のひだりの箪笥たんすの引き出しひだりを開けました。引き出しおおくみどりの奥おくに、緑みどりのリボンできちんとまとめてある手紙を見つけました。悪いことだ  
とわかつていましたが、わたしはその手紙を読んでしまいました。手紙は三十通ぐらいありました。封筒の裏には、いもうとおんなの友だちの名前なまえが書いてありました。でも、



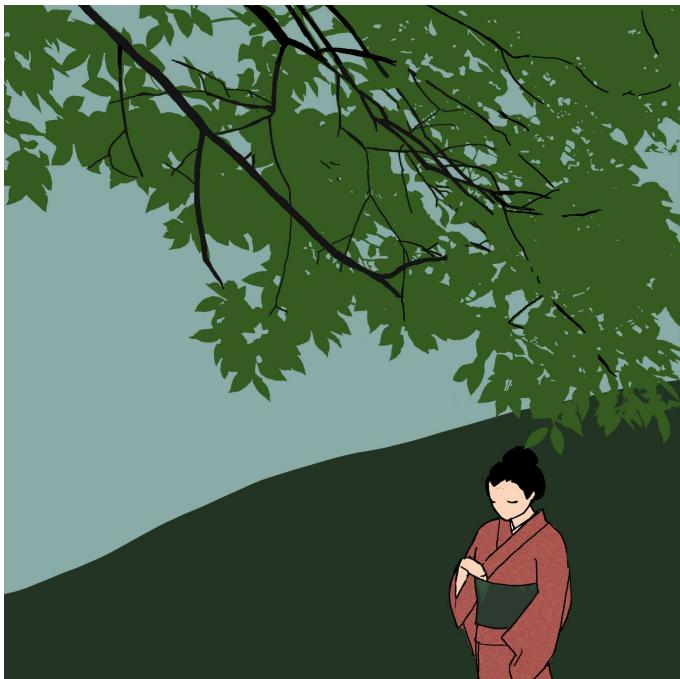
なかよほど、本当は全部、M・Tという男の人からの手紙でした。父も私も知らない男の人です。M・Tは私たちに知らないように、封筒に自分の名前を書かなかつたのです。

手紙は恋の手紙でした。M・Tは近くの町の貧乏な若い詩人でした。妹と一緒にM・Tは、愛し合つていました。厳しい父が知つたら、どうなるかと恐ろしい気持ちでしたが、二人のかわいい恋のやりとりを読むうちに、恋をしたことのない自分が樂しくなり、幸せな気持ちになりました。

でも、去年の秋の、最後の手紙を読んだとき、私は、息が止まるほどびっくりしました。妹たちの恋は、ただ心だけのものではなかつたのです。その上、M・Tは妹が病気だと知つて、妹を捨てたのです。

私は、手紙を全部焼きました。一通残らず焼きました。これで、私が黙つていれば、妹はきれいな少女のまま死んでいけるのです。それでも、私は自分のことの

ようくす  
に苦しくて、いもうとほんとう  
妹が本当にかわいそうだと  
思いました。  
それから、いつかす  
五日過ぎました。



わたしはその日を忘れることができません。それはとても暑い日でした。五月は草や木の緑がきれいな季節ですが、わたしには緑がまぶしすぎました。いろいろ考えると苦しいことばかりで、私は下を向いて、緑の中の道を歩いていました。妹はもうすぐ死ぬのです。私は悲しくて、家に帰る途中、誰もいないうところで、大声で泣いてしまいました。家に帰つたときは、もう夕方でした。

帰ると、いもうと

「ねえ  
姉さん」

と、わたしを呼びました。

そのころ、いもうと とてもやせていて元気がありませんでした。

いもうと ね へや いもうと まくら てがみ ゆび  
妹が寝ている部屋へ行くと、妹は、枕のそばの手紙を指さして聞きました。

「ねえ  
姉さん、この手紙、いつ来たの？」

わたし 私は、すぐに返事ができませんでした。自分で自分の顔色が変わるのがわかりました。

いもうと  
妹は、また聞きました。

「いつ来たの？」

わたし 私は、妹が私の気持ちに気がつかないように、普通の顔で答えました。

「さつき、あなたが寝ている間に。あなた、笑いながら眠ついたわ。私がこつそり置い  
ておいたの。知らなかつたでしよう？」

いもうとわたしでがみみわら  
妹は私に手紙を見せて笑いました。

「姉さん、私はこの手紙を読んだけど、おかしいの。これ、知らない人からの手紙よ」  
わたしは、妹が嘘をついていることを知っていました。その手紙はM・Tからの手紙なのです。でも、妹は私がM・Tの手紙を読んだことを知りません。だから、嘘をついています。

「私は何のことか全然わからないの。姉さん、この手紙を読んでみて」と、妹は言いました。

わたしは腹が立ちました。妹が本当のことを言ってくれないからです。  
「読んでもいいの？」

私は手紙を受け取りました。でも、受け取ると、手が震えました。心の中では困つていたのです。手紙に何が書いてあるか知っていたからです。でも、そのことを妹に気づかれないようにしなければなりません。私は、手紙を声に出して読みました。



「ごめんなさい。今日までずっと  
手紙てがみを書かなかつたのは、ぼく  
が、自分じぶんに自信じしんがなかつたから  
です。ぼくは、貧乏びんぱうだから、あな  
たが好きなのに、何もできませ  
ん。ぼくは言葉ことばで愛あいを表あらわすこ  
としかできません。あなたのことを  
一日いちにちも忘わすれることはありま  
せん。それなのに、ぼくは何もし  
てあげられないのじぶんで、自分が嫌いや  
になつて、つらくて、あなたと別わか  
れました。でも、それは、間違まちがい

でした。ぼくには、何の力もないのですから、言葉だけでも伝えなければならないと思いました。小さいことでも、自分にできることをするのが本当の勇気です。ぼくはもう逃げません。あなたを愛しています。これから毎日、詩を書いて送ります。それから、毎日夕方六時にあなたの家の外で口笛を吹きます。ぼくの口笛はうまいですよ。こんなことしかできないことを笑わないでください。いいえ、笑っていてください。元気でいてください。ぼくたちのことを神さまは見てくれています」

手紙には、M・Tの詩もついていましたが、私はそれも最後まで読みました。

妹は、聞き終わると言いました。

「ねえさん、わたし、知ってるのよ。ありがとう、姉さん。これは姉さんが書いたのね」

私は返事ができませんでした。恥ずかしくて手紙を破つて捨てたくなりました。そうです。この手紙は私が書きました。妹がかわいそうだったから、私が書いたのです。M・Tの字を真似して、M・Tになつて私が書いたのです。妹が死ぬまで

これから毎まいにちへたしつく、そとくちぶえふつくりで口笛も吹くつもりでした。

「妹いもうとは言いました。

「姉さん、心配しなくてもいいのよ」

はなし話をする妹いもうとは、とても美うつくしかつたです。

「姉さんはあの手紙を読んだのでしょうか？ それで、M・Tになつて、私わたしに手紙を書いたのでしょうか？ あのね、姉さん、心配しなくてもいいのよ。あの手紙は、一昨年の秋から、私が自分で自分に書いて送つたのよ。姉さん、笑わないのでね。自分で自分で自分がみ手紙を書くなんて、ばかなこと。でも、若い時間は大切なものよ。病氣になつてから、よくわかつた。私わたし、男の人と付き合つて、もつと遊べばよかつた。恋をすればよかつた。私は恋をしたことがないし、男の人と話をしたこともない。姉さんもそうでしょう？ 姉さん、私たち間違つていた。私たちはいい子すぎた。ああ、私わたしまだ死にたくない。私の手が、指が、髪が、かわいそ。死ぬなんて、嫌だ」

いもうと 妹はそう言いました。私は、恥ずかしいし、悲しいし、怖いし、いろいろな気持ちで  
かな 胸がいっぱいになりました。ただもう涙が出てきて、やせた妹の体を抱きしめました。

そのとき、聞こえたのです。口笛です。家の外の葉桜の向こうから聞こえます。時間は六時でした。私たちにはびっくりして、それから怖くて、抱き合つたまま口笛を聞いていました。神様はいる、きっといる、私はそう信じました。

いもうと 妹は、その三日後、死にました。医者も驚くぐらい、静かに死にました。けれども、私は驚きませんでした。神さまがなさつたことだと信じていました。

いま 今は、わたしとしも年をとつてしまい、あの口笛は、もしかしたら、父だったのではないか、と思うことがあります。仕事から帰ってきて、私たちの話を隣の部屋で聞いたのかもしれません。父は厳しい人でしたが、妹がかわいそだと思ったのかもしれません。

ません。父はもう十五年も前に死んだので、本当のことはわかりませんが。  
でも、私は、やはりあれは神さまだったと信じたいです。そう思ったほうがいいと思  
うのです。

は ざくら くちぶえ だ ざいおさむ は ざくら まてき  
**葉桜と口笛 太宰治『葉桜と魔笛』より**

発行 : 2023年5月5日

原作 : 太宰治

簡約 : 作田奈苗

イラスト : 作田奈苗

監修 : NPO多言語多読





TADOKU  
Supporters

NPO多言語多読  
tadoku.org



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>